



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching and Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2015

vol. 17

学びをデザインするということ

教育開発支援センター長 田中 俊也

もう15年以上も前のことになるが、関西大学から在外研究の機会を与えていただき、アメリカのピッツバーグにあるカーネギーメロン大学に1年間滞在した。その期間に指導を受けたサイモン先生(Simon, H.A.)は、ノーベル経済学賞を受賞した認知心理学者であり、経済学者であり、コンピュータ科学者でもあった。

“How many Simons?”(サイモンはいったい何人いるの?)という論文が出るほど、さまざまな領域での第一人者であった。そのなかでも、「デザイン学」の領域での第一人者であることはあまり知られていない。

サイモン先生に言わせれば、現在の状態をより好ましいものに変えようとするのはすべてデザイン活動だ、ということになる。すなわち、今の状態をよりいい状態に変えていくという問題解決の本質は、実はデザインをすることなのだ、ということになる。これを、問題解決の心理学の用語で表現すれば、なんとかしなければならぬ初期状態(現在の「問題」状態)

を、好ましいと思われる目標状態に変換すること、そのためにとることのできるさまざまな手段・操作を駆使し、とってはいけない手はぐっと我慢しながら、最終的には目標状態に到達し、それで「解決」したことになる。ここでいう「状態」は、心理・社会的状態(心・気持ちの状態)であったり、物理的環境(物の世界の状態)であったりする。いずれにせよ、その変化が「満足」化された時、それを一定の解決、とみなす。

こうして、問題解決の視点からは、満足化されればそのサイクルは終了したことになるが、実際のわれわれの生活ではそうではない。一定の満足は、時間や環境の変化に伴ってすぐに不満にみちた問題状況になる。そう考えると、日常生活でのわれわれの、よりよい状態への変化を目指した活動は、こうした、1つのサイクルで完結する問題解決、と捉えるより、もっと長期に渡る変化への志向を示すデザイン活動、と考えるほうがより妥当である。

学習は、与えられた一定の課題を解決すれば完結するが、学びは自らの内に湧き出した問題状態を解決状態に変えていく、絶え間ない主体的な活動である。学びをデザインする、とは、そうしたアクティブな学びを支援する人的・物的・社会的諸環境を整備することである。大学の重要な使命の一部は実はそこにあるのだ、ということが最近になってやっと気づかれ、カリキュラム改革やコモンズの空間の整備等が本気でなされるようになってきた。20年来の主張が現実化されていく、いい流れである。



サイモン先生と(1997年5月)